

映画技術研究作品「ギフチョウと生きる郷」^{さと}の製作

矢島 仁
映像学科

A Study of Scientific Filming about "Gifu-chou" — *Precious Butterfly in Japan*

YAJIMA Hitoshi

Department of Imaging Art

(Received November 12, 2002; Accepted January 18, 2003)

1. はじめに

映像学科の教育の中でとくに映画技術を専門分野とする筆者の場合、教育活動のベースとなる研究活動として映画作品の製作と発表はたいへん大きな意味を持っている。

それは、フィルムや照明などと撮影の関わり合いに於て、演出要素との関わり合いの少ない技術的部分は単なる実験としても実行可能であり、またその部分のみの評価もできる。けれども、一本の映像作品としてとらえた場合、単純な実験という視点では評価の低いショットも、作品の中では高く評価される効果を生み出す可能性もあり、やはり、完成された作品としての視点から評価されなければならないと考えている。

しかし、大学の教員という立場のまま実際の商業映画のプロジェクトを企画・製作したり、あるいは或るパートを完全に受け持つ事は、拘束される時間の制約から極めて困難である。

で、あるならば商業映画ではなく、短編映画のプロジェクトに部分参加することにより技術的研究ができると考え、筆者は過去に幾つかの短編記録映画に(注1)あるときはB班撮影として、またあるときは録音効果として部分参加し知見を深めてきた。標記映画作品「ギフチョウと生きる郷」(注2)についても、当初は従来のスタイルとしての参加、具体的には特殊撮影担当の撮影補という立場であった。

ところが、ベテランスタッフ達と共に仕事ができるかと大きな期待を胸に抱く間もなく、企画製作者・能勢武夫氏の逝去。けれどもその時点で、面白いと感じていた企画。お蔵入りにするには惜しいと思い、遺族および初期のスタッフから、撮影の完了した部分のネガフィルムと製作権の譲渡を受け、製作者としての立場で撮影を続

行することにした。

したがって、一スタッフとしての参加と、製作者となつてからの立場と、一つの作品でありながら大きく関わり方が変わっている。この両者を併記すると非常に複雑になる恐れがあるため、以下の部分では矢島が製作権を受領してからの撮影設計・録音設計などの技術的な部分のうちとくに専門分野に関係の深い撮影の部分と、利用や保存など、製作者としてのかかわりについてを主に述べてみたい。

2. 研究の開始

2-1. 企画書の受領

企画書に記されていた仮題は「藤野町の幻の蝶」企画製作は能勢武夫・能勢広、しかし、先に記した理由から製作は事実上中止されていたものである。

筆者は立場上、映像学科学生と共に実行できるような教員としての研究テーマを模索中であった。そして、それまでスタッフの一員であった仮題「藤野町の幻の蝶」の撮影は、教員の研究としても有意義であると考えられたので、企画書の忠実な映像化を目標に企画の譲渡を願い出た。

企画を譲り受けてまで製作を続行した理由は二つある。その一つは、困難と思われる撮影に対する技術的な挑戦。そしてもう一つは、科学映像のベテラン能勢武夫氏の企画した映画を、自分としても観たかったから。観たいのならば作ってしまうしかない、という発想。それ程までに企画書が魅力的であった。

2-2. 企画書

2-2-1. 企画意図

「ギフチョウ」は体の形態に多くの原始的な形質を持ち、アゲハチョウの祖先種の特徴を今日に伝えています。津久井郡藤野町牧野・篠原に棲息するギフチョウは神奈

川県指定天然記念物であり、豊かな自然に囲まれた石砂山の一部に棲息しており、棲息の東限でもあります。

この貴重なギフチョウの生態を軸に、保護活動をしている牧野・篠原地区の「ギフチョウを守る会」の人達や自治体。或いは地元の小学生の見た目を通して、都心からそれ程遠くない静かな山村の牧野・篠原地区の自然と地元の生活などを織り混ぜ、自然の大切さを訴えるものです。

各地の小学校高学年向けの自然科学・社会教育の教材とすると共に、この貴重なギフチョウの生態を後世に残すことを目的としています。

2-2-2. 構成内容

1. 牧野・篠原地区の自然と生活との関わり。
2. 地元自治体と保護活動に携わる人達の活動記録。
3. 地元の小学生の課外活動に於けるギフチョウの生態観察の様子。
4. ギフチョウの生態を四季に渡り記録。
5. ギフチョウが産卵し幼虫の食草でもあるカンアオイ。成虫が吸蜜するスマレ、サクラ、カタクリ、ハルリンドウ、ツツジ類、モミジイチゴなどの花々を微速度撮影を含めて記録し、自然環境を描写。
6. どうしてギフチョウは減少したのか？ 保護するにはどうしたら良いのか？ 環境保全はどの様にすれば良いのか？ これらの事を保護活動に携わる人達やギフチョウの研究者に語ってもらう。

ギフチョウの生態を軸にこれらをモンタージュすることにより、ギフチョウを通しての人間と自然の関わり。或いは観察する子供達の様子を通して自然の大切さを訴える作品とする。

2-2-3. 撮影／仕上げ

この作品は、多メディアの映像媒体（フィルム上映、TV、HD-TV、ディスク）などに対応することを考慮してフィルムで撮影。16 mm フィルムでの撮影を基本とし、ギフチョウの生態に関しては35 mm フィルムで撮影。完成作品のオリジナルも、16 mm のフィルム仕上げとし、上映時間は20分以内。完成は平成9年の夏頃を予定。（企画書の作成日は平成7年4月）

2-3. 製作形態

製作者として関わるためには、製作資金の調達がまず必要であり、自己資金で賄えない場合一般にはスポンサー企業などと提携し、お互いの利益の接点を見出す事が行われる。また、芸術文化振興基金助成金というもあり、製作費総額の半額助成（審査あり）という非常に大きな助成が得られるものの、製作者が法人格を持っていない限り制約がある。

この作品の場合、ベテランカメラマンの製作から素

人同然の筆者が受継いだ訳であるから完成時期は大幅な延長が予測され、企業との提携や助成金の申請は困難であった。（年度内完成が原則）したがって予算的には、主に自己資金（矢島個人の貯金）と東京工芸大学の教育研究費を用いての製作という計画で開始。機材は主に大学機材および篠田カメラマンからの借用。フィルムは各方面から端尺を調達した。

また、スタッフは実地の勉強のために学生を多く起用した。藤野町での現場取材、編集、録音、ダビングなどで活躍して貰い、学生諸君にとっても有意義であったと考えている。もちろん報酬の支払いはなく食事支給のみ。

3. 技術的問題とその解決

一言で撮影技術といってもそれは単なるカメラとフィルムと照明の関係だけではない。被写体をどの様にしてレンズの前に持ってきて演技をさせるのかということが問題となる。劇映画の場合、ギャラを支払えば俳優を呼ぶことができ、ヨーイ・ハイ の掛け声とカチンコの音で演技が始まる。そしてそれは撮影者ではなく演出者の範疇である。

しかし本研究作品の場合、主役はギフチョウである。彼女等？は極めて気難しく、しかも人間語が通じない。そのギフチョウをカメラの前で演技をさせなければ作品が成り立たないのは明白。

また、助演者としての人間も登場するが、ドラマの撮影をしているわけではないので、ヨーイ・ハイ とか、カチンコを叩く訳には行かない。あくまで“そっと撮影をさせていただく”立場なのである。

3-1. レントゲン撮影

「蝶の蛹の中をレントゲンで見せたいが、うまく行かない。」という相談を持ち掛けられたのが企画と出会う発端。すでに歯科用X線源を用いてのテスト撮影は試みられていたが、思わしくないとの事。

とくにX線にこだわる訳ではないが、蛹を切らずに内部の様子を視覚化するというのが条件である。10ヶ月の間、蛹で越夏・越冬するギフチョウの蛹は皮膚が厚く、しかも黒褐色に着色している。やはり何らかの方法でX線撮影を試みることにした。

最初のテスト撮影は、歯科用とは異なる波長域のX線を用いた撮影。被写体はギフチョウの蛹とクスサンの蛹（大きさが違うので適正な露出量の判断用）フィルムは工業用超微粒子X線フィルム FUJI-LX25、軟X線装置メーカー・ソフテックス社の研究施設での撮影。加速電圧と露出時間を変えて数枚のテスト、フィルムは専用のカセットに収めての露出、現像はX線フィルム用自動現像機。

取り敢えず蛹内部の気管が描写される結果を得た。

ところが、X線による影もフィルム上ではネガ像である。通常の非破壊検査では、画像として情報が読み取れば良いのでネガ像でも構わない、しかし映画の演出上はポジ像にしたかったので印画紙への焼き付けを試みた。結果は、焼き付け困難。非常に硬調なX線フィルムを、同じく硬調な印画紙へ焼き付ける事は極めて困難。第一回目のテストは撮影可能という結果と共に、コントラストの問題が提起された。

第2回目のテストはX線フィルムの使用をあきらめ、写真撮影用の低コントラスト白黒フィルムを使用してのテスト。一般撮影用35mmフィルムを短尺に切り、暗室内で黒ビニールに封じ込めて撮影。微粒子フィルムを数種類テスト露出、現像は自宅暗室にて。結果は、大幅な感度不足。かつ短尺に切ったために操作性が非常に悪いという完全な失敗。

第3回目のテストは操作性の改善を目指し、35mmパトローネ巻のまま装填できるX線ホルダーを自製した。そしてあらゆるフィルムを手当たり次第に試してみた。

その結果、もちろん普通のX線写真用としては軟調過ぎて使えないが、この映画の狙いにぴったりなフィルムが見つかった。コニカのカラーネガLV-400、しかも普通写真のフィルムなのでミニラボで処理できる、ソフテックス社で撮影し、すぐ向かいのスーパーマーケットで現像すれば、結果が確認できる。加速電圧40kV、露出時間1秒が本番撮影の基準となった。

最終的には、薄緑色の蛍光スクリーンに怪しく浮かび上がるポジ像が演出上のねらいである。時期を変え、向きを変えて写した計82枚の内から、構成の都合で雪が降った時期のネガを選びカラー印画紙に色を指定して焼き付け(カラーフィルムの全層とも同様に感光しているので無彩色のネガ像であり、何色にでも焼ける)蛍光スクリーンの丸窓を意識した丸に切抜き再撮影。周囲が落ちるようにピンスポで丸く照明を行い、撮影でフェードイン・フェードアウト、照明をスライダックで上下げすると同時に色が変わってしまうので、NCミッチェルのシャッター開角度を可変してフェードした。

カラーネガで直接撮影をするという常識では考えられないフィルムの選択が、柔らかなトーンのX線像を生み出した。

3-2. スタジオ撮影における赤外線の影響

3-2-1. ナチュラルなライティング

ギフチョウの撮影、本来であればすべて野外で撮影するべきである。しかしロケ地は自然環境保全地域の特別

地区、しかもプロテクトされた生物ギフチョウの生息地。

すべての生活史を野外で解明するためには、時としてカメラを地表面に据えるための穴を掘らなければいけないだろうし、また、撮影用の蛹を見付けるために落ち葉を綺麗に掃除する必要があるかもしれない。けれどもそれは許されない。

したがって、とくにクローズアップの部分と、羽化などの温度管理の必要な撮影は、環境に対する配慮からスタジオでの撮影が必要になった。

スタジオ撮影を野外の撮影と繋がるようにする技術、それは被写界深度のコントロールと、照明のコントラストである。つまりレンズのFナンバーを幾つに設定するかという事と、野外に見習う強い照明比。これはけして劇映画の屋内撮影ではないのだから、家屋内の柔らかい照明を見習う必要はない。

要するに、ファインダーの中が山野に見えればよい。もちろん、陽光を反射してきらきら輝く木の葉や、眩しい木洩れ日も含めて、ファインダーの中に山の風景があればよい、という簡単な判断基準で照明設計をした。

しかし、これを達成するためにはどうしても解決しなければならない問題が潜んで居た。人工照明に含まれる赤外線の除去である。

3-2-2. 赤外線

太陽の直射は「おひさま」と呼ばれるように暖かさの象徴でもある。事実、地球に降り注ぐエネルギーは地表を暖め、熱線を受ける量と宇宙空間に放射し冷却される量との僅かな差で地球上に摂氏-50度から+40度程度の大変な気温差が生まれている。

熱としてのエネルギーは、全放射のうち主に赤外線として降り注いでいるが、光球の色温度およそ6500Kという高温のため、むしろエネルギーの主体は可視光の短波長成分と紫外域にあり、より低い色温度の写真用電球と同じ明るさで比較した場合、むしろ冷たい光源といえる。さらに実際には、地球大気の微細な塵とオゾン層により紫外線成分と短波長成分が減衰し、また赤外線などの長波長成分は空気中の水蒸気に吸収され、減衰する。したがって可視光域のなかでも500~700nm付近の光が比較的効率よく地表に到達している。(注3)

3-2-3. 人工照明

映像作品を製作する場合、多くの場合、人工の光源を利用する。演色性が良く操作が簡単なため一般にはタングステン電球が多用されている。そして色温度に関しては、フィラメント材料の融点からくる制約があり、実用的には色温度3200Kに設定されている。(タングステンは理想の黒体ではないので、実際の温度が3200Kになっ

ているというわけではない。)

この程度の色温度では、エネルギーの主体はむしろ赤外域にあり(注4)、本来的には極めて暖かい光源であるものの、普通のスタジオでは2000ルクス程度まででの利用なので、あまり問題にはならない。

しかし本研究作品の場合、この程度の照度で中庸感度のフィルムを用いて等倍撮影をしようとする、絞りはF:2程度となる。これでは被写界深度がきわめて浅く、日中の野外撮影と比べると違和感をともなう恐れがある。

これを解決するには照度の増加しかない、もし等倍撮影で、しかもF:8以上に絞りをたければ、およそ6万ルクス程は欲しいところである。しかし何もしないタングステン電球で、これを実現する事は恐らく不可能。なぜなら被写体が熱のため燃え出す恐れのある程、電球を近付ける必要があるからである。(注5)

赤熱によらない発光、すなわち原子を励起させ基底状態に戻る時の発光を利用する放電灯は比較的発熱を伴わない、すなわちエネルギー効率のよい照明として利用され、演色性を改善したHMIランプは映画撮影の照明としてなくてはならないものとなっている。しかし、これも発光そのものは発熱によらなくても、放電に伴う発熱は石英ガラスの管球そのものを赤熱させ、多量の赤外線が発生している。

いずれにしろ、実用的な人工照明の多くが、照度に比して多量の赤外線を含むため、とくに高照度が必要なときに問題が発生する。

理想的な光源は、やはり直射太陽光であろう。作品の中で、cut, 71. 72. 終齢幼虫の吐糸行動のショットは直射太陽光を用いた撮影である。窓際の太陽直射を鏡で室内奥まで導き、照明用カボックに反射させ、複数の位置から照射している。水フィルター(後述)の移動を待たない状況で利用した、太陽の直射と鏡の利用であった。

3-2-4. 赤外線の除去

問題解決の要は、可視光の成分に影響を与えずに赤外線のみを効率よく除去できればよいということ。

そうすれば、高照度の照明しても熱の心配をしなくて済み、それはまたスタジオとオープン、共に同じような深度の映像を可能にし、ルックの異差がなくなる事に寄与するのである。

テストはガラス製のラッテン#301A および#304インフラレッド・カットオフ・フィルター。確かに効果は認めるが、あまりに小さい。大きなサイズでの入手ができない事と、価格の面で使用困難。

結局原点に戻って。水をフィルターにする工夫を重ねた。天井近くに配したキーライト、斜め下の方向に向いている。その前にどの様にして水槽を設置すればよいの

か?、しかも任意に移動も傾きも可動しなければならない。

20年程前にじっくりと見学した木造船の建造と、ヨットで遊んでいた頃のロープワークが役だった。木の箱に堅練ペイントを自製してガラスを組み込み、数本のロープで吊り下げ、向きも変えられるようにした。工作のし易さと総重量との兼ね合いで決まった水の厚さ、130 mm、ソーダ石灰ガラス2枚合計の厚さ10 mm、赤外線はみごとに除去され、涼しい光を得る事ができた。

3-3. 終齢幼虫が糸を吐くシーンの撮影と照明

蛹になる所まで追跡できた幼虫は、まず糸を吐き自分の空間を確保する。しかし糸の網を作る行動はなかなか撮影のチャンスがなかった。その時期の幼虫を24時間追跡すれば絶対に撮影できるはずだが、筆者は勤め人、毎日仕事にでなければならない。

少しでも観察と撮影の時間を稼ぐため、スタジオ時間を日本時間に対して大幅に早め、毎日午前4時にはお日様がぼかぼか当たってきた設定での照明と気温の管理、午前5時から8時までが主な撮影、次第に減光し、午前9時には早くも午後の設定、勤務に出掛けるという具合。夕方はなるべく早く帰宅して消灯、雨戸も閉め、かなり早めの夜にした。

そんなこま切れの時間で撮影していたある日、出勤のために部屋を出ようとしていたとき、観察台のサブステージで、まさに糸を吐いている終齢幼虫を発見。少しでも振動が伝わると暫く動きを止めてしまう。そこは観察台のある部屋の隣室、照明もない。しかも出勤の時間は迫っている。がたがたと振動を伴うセッティングもできず、太陽の直射を鏡で導き、手持ち撮影。息を止めていられる時間が1ショットの長さ。太陽は実に早く動くので3ショットとりあえず押さえただけ。機材はアリ16ST、40 mm シネクリスター。

我々の観察では、糸を吐くのはごく当たり前の行動、特別という意識は無かったが、解説台本を作る段階で何と呼べばよいのかが分からず、神奈川県立博物館に研究者を訪ねた。「恐らく、まだ誰も観察したことのない行動、しかもギフチョウの分類上の位置付けにも影響する可能性のある重大な発見」であるとのこと。撮影者自身も驚いた、すぐに学会への発表を委ねた。(注6)

3-4. 連続撮影に制約の大きいフィルムで、蝶の飛翔をどのようにして捉るか

これが、最も解決困難な問題であった。初めのうちは、どうしてもこの部分は満足に撮影できなかった。とにかく、蝶の飛翔は気紛れ、そのものに見えたのである。

そして、年月の経つうちに次第に蝶の動きの規則性が読めてきて、フィルムの限られた尺数のなかに狙いのア

クションを収めることができるようになった時「ギフチョウと生きる郷」はクランクアップした。

つまりエンディングの部分、林の奥とカメラの前を2回往復し地表近くに止まる飛翔シーン cut, 138は、この撮影で最後に撮影されたショットであり、偶然ではなくスタジオ撮影の cut, 139に繋げるカットとして狙って撮影したものである。またそのほかに、アマチュアカメラマンを挑発するように飛ぶ cut, 132も、フレームインする cut, 6も、いずれも構図を考え待ち構えていたところに飛び込んできた蝶である。

撮影のノウハウとしては、数百日にも及ぶ山での観察の蓄積。感覚的に蝶の気持ちが解るようになったこと、としか表現できない。

写すこと自体は極めて簡単、けれども偶然ではなく、前後の繋がりからこういう画がほしいと編集者から指定されたとき、それを撮影する鍵は「どれだけフィールドで観察したか」でしかない。

3-5. 録音

3-5-1. 現場録音

蝶の一生の中で、我々の耳にはっきりと聞くことができる音を発するのは唯一回、羽化の最初の瞬間「パチッ」と蛹の皮が割れる音。

羽化をするのはよく晴れた日の午前中、地表付近の気温が氷点近くから毎時摂氏6度の割合で急速に摂氏14度以上にまで上昇するような条件（注7）の時である。しかし、このとき同時に落ち葉が乾燥してパチパチと音を立てるので、実際には聞き分ける事は非常に困難である。

したがって蝶の生態部分はサイレント撮影とし、人間の活動の部分のみできる限り録音もしたが、劇映画のシンクロによる同時録音とは全く異なる録音設計をした。

具体的にはカチンコを打てないという制約があり、音はWM-D6C録音機（カセット）で長時間連続的に記録しつつ、全く別個にカメラを回した。

同期の必要な部分は、シネテープにリレコーディングし、スタインベック編集機で唇を読んで合わせた。

3-5-2. 音楽録音とダビング

幸いにも作曲家の協力によりオリジナルの音楽をつける事ができた。これにより、何よりも映像と音楽との効果的なコラボレーションが作品の品位を高めることになったと思う。

音楽録音は、映画の音楽録音の原点に戻り。ホールを借り切り、すべての楽器を揃えた上で映画を上映しつつ収録した。音楽家たちが楽しみながら工夫を凝らしたセッションは延べ24時間にも及んだが、中でも「滴」の音（ハーブでぼろんと一つ爪引くだけ）にはメロディが無いだけに、どの音が最も相応しいかという問題でたいへ

ん手間取った。収録はDA88による8トラックデジタル録音、ダビング時にモノラル及び2トラックステレオにミックスダウンした。

最終的にすべての音をミックスするダビング作業は、東京テレビセンターに於て行った。音楽のミックスダウンを除いて、現場音の仕込み・ナレーションの収録・最終ダビングまで23分間の作品に対する作業時間は25時間であった。

4. 最終仕上げ媒体の決定

4-1. フィルム作品にした最大の理由

ギフチョウという、地域によっては絶滅も危惧される野生生物の記録は、映像による標本としての使命もあると考えた。そしてそのために、長期保存と国際的利用に耐え得る映像媒体として35mmフィルムを選択した。

もちろんこれには反論もあるだろう。高品質のビデオシステムで撮影し、デジタル変調をしておけばデータを劣化させることなく保存・複製できるはずである。という主張もある。そして、フランスなどでは現実に映画のデジタルアーカイブが整備されつつある。（注8）

実は「ギフチョウと生きる郷」もすでにデジタル化され、日本科学技術未来館のサーバーに収まっており、端末からのアクセスが可能である。確かに、利用と複製の面ではデジタルデータに置き換えて収蔵する事は意味を持つだろう。しかし、現在のデジタルフォーマットが将来にわたつて不変であるという保証はない。

保証のない点ではフィルムも同じであるが、発明からおおよそ100年、基本的な規格が変わらなかった（むしろ、35mm4p以外の規格が淘汰されたといった方がより正しい）ために、映写機をはじめとした関連機材は世界中に普及しており、世界規模でコンパチブルなのである。

これに対してビデオシステムは、まだ技術革新の過渡期にもある。世界中に数多くのシステムが存在し、発展性と共に、幾らでも新しい技術に置き換えられる危険性を併せ持っている。

現在のデジタルフォーマットが今後変わってしまった場合、新フォーマットに対応させるべく方式変換をすれば、デジタルデータの利点は失われ、情報の劣化は避けられない。また、限られたタイトル数であれば劣化覚悟でのフォーマット変換も可能であるが、膨大なタイトルを擁した場合、デジタルフォーマットの大きな変革は、収蔵資料の無意味化を意味する。

4-2. 16mmフィルムではだめなのか

さきに、フィルムは世界中でコンパチブルと述べたが、16mmフィルムの場合、規格は世界共通でも利用面でビデオシステムと競合し、我が国においては事実上もは

や有効に利用されていないのが現状である。

「ギフチョウと生きる郷」も1993年の段階では疑うことなく、撮影は35mmネガ・仕上げは16mmプリントにする予定であった。しかし、編集を開始した2000年の時点では、世の中の視聴覚機材に関する状況が大きく変わってしまった。つまり明るくシャープなビデオプロジェクターの普及により、16mm教材が使われなくなってしまったのである。

例えば東京都の場合、2000年7月には各学区毎に設置されていた都立高校の教材貸出用フィルムライブラリーが廃止され、なお必要と思われる一部の16mmフィルムを一か所に集約管理することにした、しかし以来2年3か月を経た2002年10月現在まで、そこから16mmプリントは唯の1本も利用されていないのである。(注9)

また現在、文部科学省の発表する教材の推奨リスト(注10)にも16mm映写機はなく、過去に16mm映写機を生産していたメーカーも、主力商品をビデオプロジェクターに切り替え、国内向けにはほとんど出荷されてないのが現状のようである。(メーカーは生産台数の具体的数は公表しないが、国内有力の3社のうち1社は完全撤退、1社は受注生産、残る1社は海外向けの生産が主力とのこと。)

よってこの様な状況では、もはや16mmプリントで作品を完成しても上映の機会はなく、映像としての価値は半減すると判断し、35mmプリントに仕上げることにした。

5. 評 価

今回の研究は、作品としての発表のタイミングや発表形態も含めて研究としてとらえ、まず一般の観客に対する公開を優先した。

初公開の目標を「第13回すかがわ国際短編映画祭」として仕上げの準備を逆算して進め、同時に開催9ヶ月前の2000年12月、審査を受けた。それ以来積極的に一般公開の努力を重ね、2002年3月には英語字幕版のプリントも完成し、海外へのアプローチを始めた。

ここにそれら外部評価の結果として、受賞などの履歴を列記しておく。

5-1. 映画祭の入選・映画賞の受賞等

5-1-1. 国際映画祭での上映

- | | | |
|------|-----------------------|-----------|
| 第13回 | すかがわ国際短編映画祭 | 招待作品 |
| 第5回 | 世界自然・野生生物映像祭 | 入選ノミネート上映 |
| 第7回 | 長岡アジア映画祭 | 招待作品 |
| | ロング国際科学映像ビエンナーレ(スペイン) | 正式参加 |

5-1-2. 映画賞の受賞等

平成13年度 文化庁優秀映画賞 (短編映画部門)

第43回 科学技術映像祭 文部科学大臣賞 受賞

第1回 映像技術奨励賞 (注11)

2002年度優秀映像教材選奨(教育映画祭) 優秀作品賞

第31回 小倉・佐伯賞(撮影技術報告書に対する顕彰) (注12)

5-1-3. その他

文部科学省 特別選定(社会教育部門/教養・情操)

文部科学省 選定(学校教育部門/小中高・理科)

2001年度キネマ旬報ベストテン・文化映画部門第6位

5-2. 一般公開への取組み

2001年

7月6日 イマジカ第1試写室(完成披露試写)

8月18日 須賀川市文化会館

8月23日~26日 富山市民プラザ

8月24日 高岡文化ホール

8月24日 黒部市吉田科学館

9月16日 神奈川県立藤野芸術の家

10月6日~8日 藤野町立篠原小学校

11月4日 神奈川県立相模原公園グリーンハウス

11月10日~16日 藤野町郷土史料館

2002年

1月24日 三木会研究試写(ソニーPCL)

4月15日 未来科学技術情報館

4月16日 つくばエキスポセンター

4月19日 科学技術館

5月25日 やまばとホール(文化庁上映会)

4月30日 記録映画作家協会研究会

7月31日 座間市ハーモニーホール

9月6日 長岡リリックホール

10月13日 藤野町ぐるっとお散歩篠原展

10月24日 文化庁優秀映画賞作品上映会

11月17日 京都市文化博物館

(映技協・京都支部研究試写)

5-3. フィルムアーカイブ等への収蔵

この作品は、以下の各施設に正式に収蔵されている。

35mmプリント・東京国立近代美術館フィルムセンター

16mmプリント・つくばエキスポセンター

DVD・日本科学技術未来館

6. む す び

教育現場で学生に対しては課題のシナリオを渡し、忠実な映像化を課してきたが、今回は自分自身に対しての課題であった。

一通の企画書を読取り、必要と思われるショットを撮影し現場音を集め、唯ひたすらに素材づくりをした。

苦勞の甲斐有って、さわやかで素晴らしい画が、しか

も完全なシンクロで仕上がった。そしてスタッフ誰もが素晴らしいと思うそのショットをファーストカットにすえて編集を進めた。そしてその方向で脚本を練り上げ、解説台本もでき、音楽も依頼した。

何がおこるのかな、という期待感もあって、しかも野鳥の声がさわやかに響いている。

とても美しい、柔らかなトーン。

しかし、何かが違う、テーマが違うように感じる。ほぼ90%編集が完了した段階ですべてを白紙に戻した。企画書に忠実にしたいと言ったら、スタッフ達は怒った。

いったいいままでの努力は何だったのかと、スタッフの誰もが怒った。そのショットを使おうと決めたのは矢島自身であり、ほぼ完成の状態になったとき少し違うようなので、やはり止めると言えば怒るのは当然。数ヶ月間の作業が無駄になった。

こうして編集段階では幾度となく、スタッフ間の意見の食い違いが起こった。しかしそれがよかったのだ。スタッフ誰もが、けして妥協せず意見を戦わせ、意見の合わないフィルムはお互いの留守を狙って密かに削除されていった。(注13)

スタッフは、けして仲良しグループではない、しかも雇用関係にもない。(プロデューサーに資金がなかった)

キースタッフ同志のせめぎあいが、美しくても意味の違うショットを削除し、完成度を高めさせてくれたのである。

この映画製作を通じて最大の収穫は、映画は個人ではけして作り得ないということ。撮影者本人が編集をしようとする、撮影時の苦勞が鋏を鈍らせ客観性が失われてしまう。

どんなに苦勞しても、そしてどんなに美しくても構成に必要なカットをばっさりと切り捨てる勇氣。

すべてのスタッフと企画者・能勢武夫さんに感謝

西暦2002年11月

註

- (注1) 「板橋の田遊び」撮影補、「さわやか仲間・第3回松戸市民マラソン」「昭和61年度野田市政記録」「不思議の島・西表」「西表のマングローブ」B班撮影、「大きく育て取手駅西口再開発事業」照明、「蘇る三仏堂」「新さかえ風土記」録音効果、をそれぞれ担当。
- (注2) 製作：矢島仁、演出：能勢広 2001年作品
スタッフリスト及びカットナンバーはプレスシートまたは研究試写用のパンフレットを参照願います。
- (注3) 社)照明学会/照明工学ポケットブック1947
- (注4) 和田正信・中野朝安/赤外線工学、1963
- (注5) 岩崎アイランプ、500 W-spot 白球を用いた場合、電球面から0.3 m程度まで近付ける必要がある。常識的には、もはやこの距離では火災の危険を伴う。
- (注6) 高桑正敏・中村進一/ギフチョウの蛹化時における造巢習性、日本鱗翅学会誌「蝶と蛾」52(3)：122-126, 2001
- (注7) 矢島仁2001、未発表
- (注8) 高村倉太郎/フランスがめざすデジタル・アーカイブ、映画撮影 No. 153 p. 62-65 2002/5
- (注9) 東京都教員研修センター(都立工芸高校内)
- (注10) 宇田理夫/これからの教材整備の在り方について。視聴覚教育 2002/2 p. 32-41
- (注11) 審査時の講評文「過去の実績やデータが活かされた新技術の発見と挑戦は、美的科学的作品意図を見事に体現、心地良い感動を与えている。また各種のフィルムの選択と処理の的確さは、対象に対する感覚や、愛情がうかがえる。」映画テレビ技術 No. 599-p. 66
- (注12) 矢島仁/記録映画「ギフチョウと生きる郷」の撮影報告、日本映画テレビ技術協会、「映画テレビ技術」No. 590
- (注13) 能勢広/撮影報告・ギフチョウと生きる郷、JSC 日本映画撮影監督協会、「映画撮影」No. 151